

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19530638

研究課題名 (和文) アットリスク精神状態群に対する精神病顕在発症を予防する心理的
面接法の開発研究課題名 (英文) Effectiveness of psychotherapy for At Risk Mental State (ARMS)
in preventing full blown psychosis.

研究代表者

松田 真理子 (MATSUDA MARIKO)

京都文教大学・臨床心理学部・講師

研究者番号：40411318

研究成果の概要 (和文)：

研究目的は、「アットリスク精神状態群 (ARMS) に対する精神病顕在発症を予防する心理的面接法の開発」である。研究成果は、①前駆症状が自我親和的な内容は精神科受診につながりやすく、自我違和的な内容は受診につながりやすい、②前駆症状の中で幻覚様症状を主訴とする患者は顕在発症が抑えられる傾向があるのに対し、妄想様観念を主訴とする患者は顕在発症しやすい傾向がある、③心理学的面接法の焦点として「自我」を中心とした心理構造への着目、社会の中での自己表出の在り方、家庭環境の調整や親との関係性の育てなおしなどを含む7点を挙げ、④教育現場における6つの課題を明示した。

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,500,000	450,000	1,900,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,005,000	4,500,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：アットリスク精神状態群、精神病顕在発症予防、心理的面接法、前駆症状、PRIME-SHEET、CAARMS、再発予防、自我の安定

1. 研究開始当初の背景

1960年代からドイツのHuber, G. らは基底障害仮説に基づいた統合失調症の前駆症状に関する研究をおこない、Gross, G. (1987) らはボン式基底症状評価尺度を作成している。早期精神病に対する取り組みは1984年からオーストラリア・メルボルンの早期精神病予防・介入センター (Early Psychosis Prevention and Intervention Centre; EPPIC) が精神病的

な状態を呈する本人とその家族への包括的サービスを行っており、前駆期の段階にあり、将来精神病に移行するリスクが高いと想定される精神状態を規定するための概念として、At Risk Mental State (ARMS) が提唱された。Yung, A. ら (1996) は精神病性障害に発展するリスクの高い人々を同定するための診断基準 (PACE基準) を作成している。国際早期精神病協会 (International Early

Psychosis Association: IEPA) の早期精神病のための実践的臨床ガイドライン (2005) によると早期精神病は、①前精神病期 (prepsychotic period)、②初回精神病エピソード (first episode of psychosis)、③臨界期 (recovery and the critical period) の3つの時期から構成されるとしている。前精神病期はさらに病前期と前駆期に分けられ、前駆期は抑鬱、不安、緊張、落ち着きなさ、意欲低下、強迫症状、社会不安、集中・注意力障害、睡眠障害、自律神経症状などの身体症状、社会的引きこもり、疑惑や被害感、知覚異常など「非特徴的な一般的症状」から始まる事が多い。

諸外国ではARMSに対して認知行動療法による効果が期待されるとし、French, P. & Morrison, A. (2004) による認知行動療法の有用性が確認されている。日本では水野雅文が東邦大学医療センターにARMSを対象とした精神科デイケア「イルボスコ」を開設し、顕在発症の予防を目指すとともに認知機能の改善・向上も視野に入れたプログラムを提供している。宮腰・松本ら (2006) は東北大学医学部病院にこころのリスク専門外来を開設し、アットリスク精神状態の包括評価CAARMS (Comprehensive Assessment of ARMS) を用い、受診した32例中、アットリスク精神状態であると診断した19例に対しFrench & Morrison (2004) による認知療法や、必要最小限にとどめた薬物療法的介入を開始したところ、16例が顕在発症に移行することなくフォローアップ中であり、2例が精神病に移行し、1例がドロップアウトしたことを報告している。

文献：①Gross, G. et al. (1987) *Bonner Skale für die Beurteilung von Basissymptomen*. Berlin, Heidelberg, New York, Springer Verlag. ②International Early Psychosis Association Writing Group: International clinical practice guidelines for early psychosis. *British Journal of Psychiatry (Supply)* 48: S 120-124. ③Yung, A. et al. (1996) Monitoring and care of young people at incipient risk of psychosis, *Schizophrenia Bulletin*, 22, (2), 283-303. ④French, P. & Morrison, A. (2004) *Early Detection and Cognitive Therapy for People at High Risk of Developing Psychosis*, 松本和紀・宮腰哲生訳 (2006) 統合失調症の早期発見と認知療法 星和書店. ⑤宮腰哲生・松本和紀 (2006) アットリスク精神状態の専門外来インテイク時プロフィール 第26回日本精神科診断学会プログラム・抄録集103.

2. 研究の目的

研究目的は、アットリスク精神状態群 (精神病発症危険群) に対する顕在発症予防を目指した心理療法における面接法の開発である。精神病発症に先駆け、特徴的前駆症状に着目する研究があり、前駆状態も前期と後期に別れる。本人や家族が異変に気付くのは後期前駆状態の場合が比較的多く、閾値下精神病症状や一過性精神病症状を呈示している場合が多い。アットリスク精神状態は後期前駆状態を指し、この時期に適切な心理療法を導入することにより、精神病顕在発症の予防、あるいは精神病を顕在発症しても軽度で回復し予後が良い場合が多いと考えられる。研究全体の将来的構想は、①青年期・成人早期において幻覚・妄想様の訴えがあるアットリスク精神状態群に対する顕在発症の予防的面接の実践、②残念ながら、精神病を発症した場合も軽度で回復し予後が良い方向にならぬ、あるいは再発を予防することを目指した心理療法における具体的面接法の考案であり、予想される結果と意義は、③顕在発症予防のための心理面接法の開発は社会的に大きな意義があり、厚生労働省の改革ビジョンの中に掲げられている7万2千人の社会的入院の解消を図る上で、統合失調症者の顕在発症を予防する心理療法的面接法の確立を目指す本研究は大きな貢献につながる。

3. 研究の方法

早期精神病予防に関する心理療法的アプローチは認知行動療法が主流を占めているが、本研究においては従来の支持的心理療法や認知行動療法にはとどまらない新たな心理療法的アプローチの開発に重点を置いた。研究方法の具体的な特色は以下のとおりである。

第一に爾来からある幻覚や妄想などの陽性症状への接近に対する慎重論の論理的整合性を踏まえながらも、感覚過敏や被害関係念慮などの前駆症状に関し、心理面接の中で焦点化することにより、症状を本人にとって「自我違和的」なものとして同定してもらい、未治療期間を出来る限り短縮し、精神科受診につなげる試みを行ったこと、第二に本人のみならず、家族や学校関係者も対象とした現在の症状や診断についての説明とともに精神病のリスクや治療の可能性についての情報提供などを含む心理教育を導入することにより、包括的な守りのネットワークを構築する試みを行ったことである。心理的面接法の分析の焦点は、「自我」を中心とした心理構造への着目、社会の中での自己表出の在り方について、家庭環境の調整や親との関係性の育てなおし、学校現場における諸問題の検討などである。

4. 研究成果

平成19年度から20年度にかけては、研究代表者の松田と研究分担者の和田が、早期精神病予防を目指しARMSを対象とした専門外来を開設している東北大学医学部精神神経科教室の松岡洋夫教授・松本和紀講師のもとで平成19年6月にCAARMS (Comprehensive Assessment of ARMS) を使用したARMSの同定ならびに認知行動療法も含めた精神病顕在発症予防ならびに治療に関する1週間の集中的研修を受けた。さらに平成20年3月には東邦大学医学部精神神経学分野教室の水野雅文教授のもとで、The PRIME (Prevention through Risk Identification and Management) Sheet 及び SIPS/SOPS (Structured Interview for Prodromal Syndromes/Scale of Prodromal Symptoms) を使用したアセスメントやARMSに対するデイケア活動に関する1週間の集中研修を受け、ARMSの同定ならびに認知行動療法やデイケアでのかかわりの実践的知見を得た。

これらの知見をもとに研究代表者の松田が非常勤勤務しているスクールカウンセラー先でThe PRIME (Prevention through Risk Identification and Management) Sheetを用い、ARMSと同定された15歳～18歳の15名のクライアントを対象に、顕在発症予防を目指した週に1回50分の心理療法を導入した。その結果、①前駆症状が自我親和的な内容を呈するクライアントは精神科受診につながりにくく、自我違和的な内容を呈するクライアントは受診につながりやすい傾向がある、②前駆症状の中で幻覚様症状を主訴とするクライアントは顕在発症が抑えられる傾向があるのに対し、妄想様症状を主訴とするクライアントは顕在発症しやすい傾向がある、という傾向を見出した。なお、精神科受診に繋がったクライアントは精神科医との連携のもとで心理療法を行った。

さらにスクールカウンセラー先で心理療法を導入したクライアントのうち、ARMSの中でも近い将来に精神病へ移行するおそれがきわめて高い超ハイリスク (Ultra High Risk:UHR) 基準に該当する3名の面接経過を検討し、3名に共通する臨床心理学的面接法のポイントを抽出した。3名の内訳は「自然寛解する短期間欠型精神病症状」1名、「閾値下の微弱な陽性症状を呈する群」1名、「精神病に対する素因性の脆弱性を持ち、最近の機能低下を認める群」1名である。その結果、①他者の思惑で行動するのではなく、自分が「主体」として考え、行動する体験を重ねる、②自我の強靭さを培う、③自我の可塑性、柔軟性を培う、④Locus of Control (自己をコントロールする力が外界ではなく、自分の内面にあること) を高める、⑤精神面な

らびに身体面における危険に対するセンサーを磨く、⑥自分の心の中の両価性、社会が要請してくる両価性を受容し生き抜く力を培う、⑦親との関係性の育てなおしを支える、の7点が挙げられた。これらの研究成果は研究代表者の松田、研究分担者の和田、研究協力者の水野雅文が平成20年10月にオーストラリアのメルボルンで開催された国際早期精神病学会 第6回大会でポスター演題発表した。

さらに研究代表者の松田がスクールカウンセラーとしてARMSの精神病顕在発症予防を目指し活動する中で教育現場における課題点として抽出した内容を平成20年12月に開催された日本精神障害予防研究会 第12回学術集会のシンポジウム演題として発表した。具体的には、①ARMSを生徒本人自身が認識できているか否かの問題、②精神科受診によって引き起こされるスティグマの問題、③精神科受診に対する生徒自身の理解度の問題、④父母の精神病発症リスクに対する理解度の問題、⑤各教員の立場・経験による生徒への理解度の差の問題、⑥医療関係者との連携の問題、の6点を挙げた。

また平成21年度は英国における早期精神病予防の実際に関する知見を得るため、研究代表者の松田が平成21年6月に東北大学医学部精神神経学教室の松本和紀先生、大室則幸先生、仙台白百合女子大学人間発達学科の森本幸子先生と共にマンチェスター大学のPaul French先生 (臨床心理学) を訪問し、認知行動療法を交えたARMSの人々に対する早期介入に関する研修を受けた。その後、ロンドン大学内のInstitute of PsychiatryのMcGaire教授を訪問し、ロンドンにおける早期介入の実際を学んだ。

平成21年度後半は研究代表者の松田が精神科クリニックならびにスクールカウンセラー先で新たな心理面接を行い、データを集積した。心理面接の際には、WAIS-III、WISC-IIIによる言語性IQや動作性IQ、認知機能の側面、ロールシャッハテストによる思考障害や衝動統制の側面からもARMSの段階で踏みとどまっている症例と顕在発症している症例の異同を検討中である。なお、この研究結果は平成22年11月にオランダのアムステルダムで開催予定の国際早期精神病学会 (IEPA) 第7回大会で聖隷浜松病院の精神科部長生田孝先生とポスター発表を行う予定である。なお、学会発表した内容の一部は学術雑誌『心理臨床学研究』に論文として掲載された。さらに研究成果の一部を『統合失調症と宗教—医療心理学とウイトゲンシュタイン』というタイトルで大正大学の宗教哲学者である

星川啓慈先生と共著として出版した。
以下に年度毎の経緯を記述する。

(1) 平成19年度

① 研究代表者の松田が非常勤勤務しているスクールカウンセラー先での心理面接を通じて、既に蓄積してきたデータの分析と国内外の早期精神病予防に関する書籍・資料の収集等を行った。また、研究分担者の和田と研究会を実施し、今年度のデータ収集方法を確定した。

② 研究代表者の松田と研究分担者の和田が東北大学医学部精神神経科教室（松岡洋夫教授・松本和紀講師）に平成19年6月におもむき、CAARMS（Comprehensive Assessment of ARMS）を使用したARMSの同定ならびに認知行動療法も含めた精神病顕在発症予防ならびに治療に関する集中的研修を1週間受けた。

③ 平成19年12月に研究代表者の松田が厚生労働省の精神疾患関連研究班のひとつである「早期精神病の予防、早期治療および病態理解に関する臨床的研究」（松岡洋夫班）に於ける研究報告を聴講し、臨床研究の最前線の知見を収集した。

④ 研究代表者の松田がスクールカウンセラー先で新たな心理面接を行い、データを集積した。心理面接の際には、夢分析、箱庭療法、描画などを併用する事例もあった。新たなデータと既に蓄積してきたデータを検討・考察し、その成果の一部を第37回日本芸術療法学会において「中心という表現からみる統合失調症者の精神病理」というタイトルで発表した。

⑤ 研究代表者の松田と研究分担者の和田がすでに早期精神病予防の専門外来を開設している東邦大学医学部精神神経学分野教室の水野雅文教授のもとで、平成20年3月に1週間の研修を受けた。その研修はアットリスク群であるか否かを同定するためThe PRIME（Prevention through Risk Identification and Management）Sheet 及び SIPS/SOPS（Structured Interview for Prodromal Syndromes/Scale of Prodromal Symptoms）を使用したアセスメントやアットリスク群に対するデイケア活動に関する内容であった

(2) 平成20年度

① 研究代表者の松田のスクールカウンセラー先や精神病院での心理面接を通じて既に蓄積してきたデータの分析と国内外の早期精神病予防に関する書籍・資料の収集等を行った。また、研究分担者の和田と研究会を実施し、今年度のデータ収集方法を確定した。

② 上記におけるデータの分析結果ならびに考察を「Effectiveness of psychotherapy for At Risk Mental State (ARMS) in preventing full blown psychosis.」というタイトルで、

平成20年10月にオーストラリアのメルボルンで開催された国際早期精神病学会 第6回大会（6th International Conference on IEPA（The International Early Psychosis Association Inc）で、研究代表者の松田、研究分担者の和田、研究協力者の水野雅文（東邦大学医学部 精神神経科教室 教授）がポスター演題発表を行った。

③ 研究代表者の松田がスクールカウンセラーとしてARMSの精神病顕在発症予防を目指し活動する中で課題として抽出した内容を「教育現場における早期介入の諸課題 ―スクールカウンセラーとしての関わりを通して―」というタイトルで平成20年12月に慶応義塾大学病院新棟大会議室で開催された日本精神障害予防研究会 第12回学術集会のシンポジウム演題として発表した。

④ 平成20年12月に研究代表者の松田が厚生労働省の精神疾患関連研究班のひとつである「早期精神病の予防、早期治療および病態理解に関する臨床的研究」（松岡洋夫班）に於ける研究報告を聴講し、臨床研究の最前線の知見を収集した。

(3) 平成21年度

① 英国における早期精神病予防の実際に関する知見を得るため、研究代表者の松田が平成21年6月に東北大学医学部精神神経学教室の松本和紀先生、大室則幸先生、仙台白百合女子大学人間発達学科の森本幸子先生と共にマンチェスター大学のPaul French先生（臨床心理学）を訪問し、認知行動療法を交えたアットリスク精神状態群（ARMS）の人々に対する早期介入に関する研修を受けた。マンチェスター地方の臨床心理士は社会的地位が精神科医と同等に高く、顕在発症にはつながらない擬陽性の症状を呈しているクライアントも混在している可能性の高いARMSに対しては拙速に抗精神病薬を投与するよりも臨床心理士による心理療法に力点を置いていた。その後、ロンドン大学内のInstitute of PsychiatryのMcGaire教授を訪問し、ロンドンにおける早期介入の実際を学んだ。ロンドンはマンチェスターと比べ、ARMSの人々に対し、早期から微弱な抗精神病薬の投与も併用した心理療法が行われている率が高く、世界的潮流となっている脳画像研究も積極的に行われていた。

② 研究代表者の松田が研究成果の一部を論文として「秩序について ―人間の発達過程と発症過程、カフカの『審判』からみた秩序」というタイトルで『心理臨床学研究』に掲載した。

③ 研究代表者の松田が平成21年11月に東京新霞ヶ関ビル瀬尾ホールで開催された第13回日本精神保健・予防学会の学術集会、平成22年3月に九州大学医学部百年講堂で開催さ

れた日本統合失調症学会に参加し、AMRSの早期予防に関する研究について情報交換を行った。

④ 平成22年1月に研究の成果の一部を研究代表者の松田が大正大学の星川啓慈教授と共に『統合失調症と宗教—医療心理学とワイトゲンシュタイン』というタイトルで創元社から出版した。

⑤ 研究代表者の松田が精神病院ならびにスクールカウンセラー先で新たな心理面接を行い、データを集積した。心理面接の際には、WAIS-III、WISC-IIIによる言語性IQや動作性IQ、認知機能の側面、ロールシャッハテストによる思考障害や衝動統制の側面からもARMSの段階で踏みとどまっている症例と顕在発症している症例の異同を検討中である。なお、この研究結果は平成22年11月29日～12月1日にオランダのアムステルダムで開催予定の国際早期精神病学会（IEPA）第7回大会で聖隷浜松病院の精神科部長生田孝先生とポスター発表を行う予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携協力者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

- ① 松田真理子、医療心理学を通じて培うもの、京都文教大学 臨床心理学部研究報告、査読有、第2集、2010、掲載決定
- ② 松田真理子、加藤真砂美論文へのコメント—「奪うもの」であり「守るもの」である「病」の両側面、神戸女学院大学大学院心理相談紀要、査読無、第11巻、2010、11-14
- ③ 松田真理子、「秩序について—一人間の発達過程と発症過程、カフカの『審判』からみた秩序」、心理臨床学研究、査読有、27巻2号、2009、174-183
- ④ 松田真理子、金閣寺放火僧における火の意味、京都文教大学心理臨床センター 臨床心理研究、査読無、第11号、2009、67-78
- ⑤ 和田信（2007）、うつ病の概念・定義、日本臨床、査読無、第65巻、2007、1563-1568

〔学会発表〕（計3件）

- ① 松田真理子、教育現場における早期介入の諸課題—スクールカウンセラーとしての関わりを通して—（シンポジウム発表）、日本精神障害予防研究会第12回学術集会、2008年12月14日、慶応義塾大学病院新棟大会議室
- ② Matsuda Mariko, Wada Makoto, Mizuno Masafumi（研究協力者）、Effectiveness of psychotherapy for At Risk Mental

State (ARMS) in preventing full blown psychosis, 6th International Conference on IEPA (The International Early Psychosis Association Inc), 2008年10月21日, Melbourne

- ③ 松田真理子、中心という表現からみる統合失調症者の精神病理、第39回日本芸術療法学会大会、2007年10月28日、明治学院大学

〔図書〕（計2件）

- ① 松田真理子、他32名分担執筆、山中康裕監修、ナツメ社、心理学対決！フロイトVSユング、2010、114-117（フロイト対ユング 宗教に対する態度）
- ② 星川啓慈、松田真理子、創元社、統合失調症と宗教—ワイトゲンシュタインと医療心理学、2010、304

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松田 真理子 (**MATSUDA MARIKO**)
京都文教大学・臨床心理学部・講師
研究者番号：40411318

(2) 研究分担者

和田 信 (**WADA MAKOTO**)
埼玉医科大学・医学部・講師
研究者番号：10359820

(3) 連携研究者

（研究協力者）
水野 雅文 (**MIZUNO MASAFUMI**)
東邦大学医学部精神神経学教室・教授
研究者番号：80245589